

受け継がれたバトン

―神戸から大阪、市口家から細水家へ―

二つの大きな戦争を乗り越え、市口家から細水家にバトンをつなぎ、TAISEIは事業を継続させてきた。新ブランド「大成紙器製作所」をつくる過程で、五代目・細水雄一郎により明らかにされたTAISEIのルーツ。記録と細水家で伝承されてきた内容をもとに、今、ふりかえる。



1890年代の磨屋町(諏訪町)

1919-1935

[創業者]

市口善治郎

Zenjiro Ichiguchi

時は幕末。長崎県長崎市磨屋町^{とぎや}六番地に一人の若い男が住んでいた。男の家から西へ一分ほど行くと、全長十二メートル、幅三・六五メートルのアーチ式石橋に突き当たる。川面に映った影が双円を描き、メガネに見えることから「眼鏡橋」と呼ばれ、「日本橋」「錦帯橋」と並び日本三名橋に数えられる美しい橋である。

現在は諏訪町と呼ばれるその町

は、長崎で最も古い商店街「中通り商店街」が南北に走る商人の町であった。かの坂本龍馬が結成した日本初の貿易会社「亀山社中」や岩崎弥太郎が主任を務めた土佐商会もすぐ近くにあり、多くの幕末の志士がこの街を行き交っていた。鎖国時代の長崎といえば、異国情緒が漂い活気あふれる地。一攫千金を求め全国から多くの商人や遊学者などが集っていたという。その若い男も何か商売をしに奈良の田舎から長崎に出て、龍馬や海援隊の志士たちと肩を並べていたのかもしれない。

男の名は、市口彌重郎^{やじゅうろう}。のちに神戸で製函業^{せいかん}を創業することになる、TAISEIの創業者・市口善治郎

の父である。彌重郎はその後、長崎から奈良へ戻り、結婚したことが当時の戸籍謄本よりわかっている。

TAISEIの創業者・市口善治郎は一八七六年十月三日、奈良県北葛城郡御所町^{かつらぎ}で生まれた。商売をするため神戸へ赴き、神戸生まれの恵美かむと結婚。製函業を神戸市三宮で創業したのは一九一九年、善治郎が四十二歳の時である。どんな経緯を経て、なぜ創業したのか、詳細はわかっていない。時は第一次世界大戦の終わった直後。日本は好景気に沸き、神戸は西日本経済の中心地であった。父・彌重郎同様、善治郎も当時最も景気がよかった場所へ乗り



1933年頃の神戸三宮周辺、そごう右の区画が創業の地

出したのかもしれない。
善治郎は十七年間製函業を営んだのち、長女・市口敬子の婚約者・伯井金恵を養子に迎え、業を託した。善治郎は二女をもうけたが、息子には恵まれなかった。しかし、二人の娘の存在により、善治郎の意志と業が後世に引き継がれることになるのであった。

1936-1944

〔二代目〕

市口金恵

Kanae Ichiguchi

美人で勉強家であった善治郎の長女・市口敬子は善治郎とかむの自慢の娘であり、大層可愛がられて育った。一方、養子の金恵は、体は大きいがどこか頼りなく、物足りない。頭が痛いと言って部屋を出てこない日もあったという。しかし他に業の引き継ぎ手はなく、日本が第二次世界大戦へ突入する中、善治郎とかむは故郷の奈良・御所町へ引き上げて行った。
六年後、かわりに同居することになったのは、善治郎の次女・市口光子とその夫・細水幸二郎であった。千葉で生まれ、東京の中央大学で学んだのち大阪の紙の商社に勤めていた幸二郎は、得意先の箱屋にいた優しく愛らしい娘と結婚することになったというわけである。年若い二組の夫妻は、大阪市東区南玉造町

で仲睦まじく暮らしていた。しかし平和な時は続かず、時代は急展開を迎えていた。一九四一年、日本は真珠湾攻撃を開始。同居後半年もたたずして、金恵に召集命令が下った。呉海軍に属した金恵は翌年の一九四四年、九州北西海面において戦死した。

日本をどん底に陥れた第二次世界大戦。それは市口・細水両家にも暗い影を落とした。市口家では善治郎と敬子が金恵の後を追うように亡くなり、細水家では幸二郎の兄弟三人が亡くなった。細水幸二郎と市口光子は家族のほとんどを戦争で失ったのだった。

1948-1987

〔三代目〕

細水幸二郎

Kojiro Hosomizu

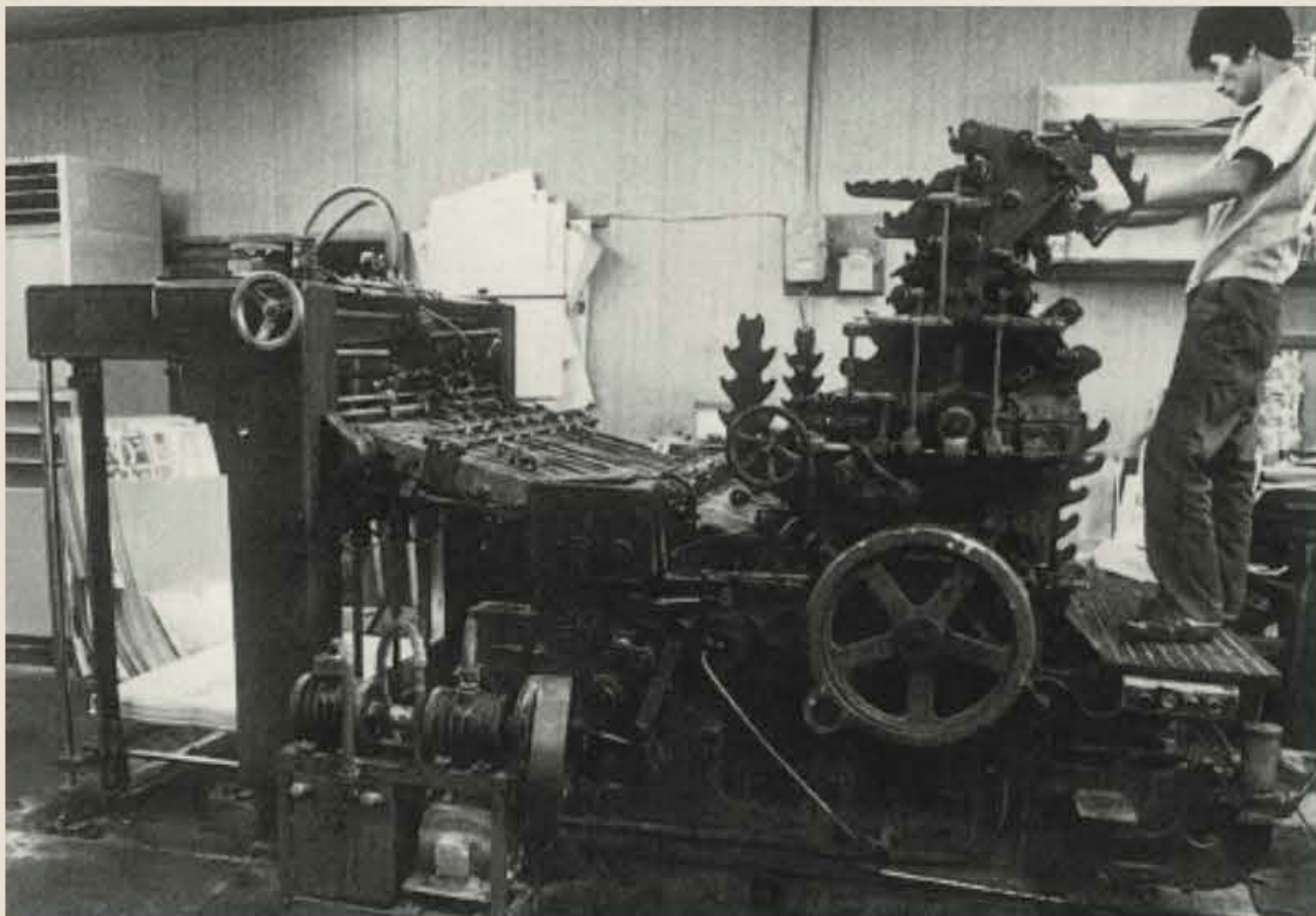
市口家から細水家へ

一九四八年、戦後の混乱期の最中、幸二郎は心から尊敬していた岳父・

善治郎の業と志を継承することを決意。大阪市生野区にて大成紙器製作所を創業し、初代・善治郎、二代目・金恵に続く三代目を名乗った。また、その翌年、一九四九年に大成紙器製作所を株式会社化した。大成紙器製作所のバトンは市口家から細水家へと引き継がれ、第二創業期を迎えたのだった。

奈良の豪族であった市口家が、江戸時代に武士から商人へ鞍替えしたように、細水家もまたそのルーツを辿ると士族、それも阿波の守護大名だった細川家につながる。細川家は清和源氏の血を引く由緒正しい武家。阿波細川家は室町時代に黄金期を迎えるも、その後は親族内で争いが絶えず、家臣の謀反により没落を迎えることとなる。

細川を名乗ることができなくなった細川真之の息子五人のうち、二人は出家。三人は「武具をすき、くわにかえて、農耕に従事するようになり、姓を改めた」（糸田川古文書より）。その三人の名乗った苗字が細水・細谷・糸田川であった。そのうち糸田川家は、江戸時代になると藍染商となり、江戸に店を構え、阿波



自動オフセット印刷機

眠れぬ夜

日本中が焼け野原と化した終戦直後、戦前から続く多くの企業の倒産が相次いでいた。日本中がそうであったように、幸二郎も毎日を生きるのに必死で、悲しみに浸っている余裕はなかった。箱の取り扱い先を探すため、毎日、焼け野原となった大阪の街を駆けずり回った。昔から馴染みの客、新しい客、少しずつ箱の注文が入ってくると、今度はリヤカーを押し、箱を納入しながら新規開拓を続けた。努力の甲斐あって、衣料品メーカーや工具店、ケーキ屋などの取り扱いが決まった。ワイシャツの貼り箱は大手百貨店にも納入され、誇らしく並べられていた。

以後、幸二郎は営業職には大卒者、工場の現場要員に島根や富山の田舎から出てきた中卒者を積極的に雇った。当時の労働時間は一日十二時間。休みは毎月一日と十五日の二日だけであった。幸二郎の家には、住み込みで働く社員が十人ほどおり、妻の光子は毎日朝四時に起き、薪をくべ、釜でご飯を炊いた。こうして会社は少しずつ軌道に乗った。

しかし、事業が順調に滑り出した

とはいえ、幸二郎は月末の夜となれば眠れなかった。取引先と交わした手形がきちんと落ちてくれるのか。落ちなければ、取引先だけでなく、自社も倒産するかもしれない。考えるだけで胃が痛かった。戦後の混乱が落ち着き、事業の基盤ができたのは昭和三十年代に入ってからのことであった。

印刷紙器

一九五七年、大成紙器製作所はオフセット印刷機を導入。箱にデザインを印刷する「印刷紙器」の製造に乗り出した。当時の紙器界の中で最も早い時期の対応であった。

一九五八年には、「大成紙器印刷株式会社」と社名を改称。当時三大ベアリングメーカーの一つであった上場企業の「光洋精工」との取引も始まり、両社は急速に関係を深めていった。ベアリングの多くは自動車メーカーに納入されていたが、光洋精工は箱に入れて小売に出すという施策を打った。その方が利益を確保することができたからである。

しかし問題は箱である。部品の種類は千種類もあり、その分の箱を用意するのは並大抵のことではない。

幸二郎は一枚の版に異なる種類の箱の展開図を無駄なくつきあわせることで、余白を作らず、紙のコストを削減させた。緻密で頭の回転の速い幸二郎だからこそできる術であった。結果として、光洋精工との取引の粗利益率は七割になり、当時の大成紙器製作所の売上は一億五千万円をいかにいくらいであったにもかかわらず、経常利益は三千万円に上った。幸二郎は財務が安定していて利益率のよい光洋精工との取引に力点を置いたため、他社との取引は縮小した。手形が落ちないかもしれないという不安もようやくなくなり、幸二郎はこの頃高額納税者としても番付されている。

しかし、そうした光洋精工の施策も長くは続かなかった。一九七三年にオイルショックが起けると、その後の不況で光洋精工は在庫過多となり、一九七五年にはトヨタの傘下となった。箱に入れて小売に出すという方針はこれにより覆されたのだった。

善治郎の生まれ変わり？

大成紙器印刷の売上上の八割を構成していた光洋精工の経営方針の変

更。この危機をいち早く察知し、次の一步を踏み出したのは入社六年目、当時二十九歳だった幸二郎の息子・總夫^{ふさお}だった。

細水總夫は終戦間もない一九四六年一月六日に生まれた。創業者の市口善治郎が亡くなってちょうど十カ月経った頃に生まれた總夫。祖母のかむは、そんな總夫を抱き、「善治郎の生まれ変わりだ……」とつぶやいたという。細水幸二郎と市口光子の間に生まれた總夫は、細水家と市口家の血を半分ずつ引き継ぐ象徴的な存在であった。

しかし父の幸二郎から「会社を継げ」と言われたことは一度もなかったという。頭脳明晰、趣味は読書、新聞は毎日五紙読み、学ぶことが大好きだった幸二郎は、明けても暮れてもラグビーに励む總夫を見て、「あいつはアホや……」とよくこぼしていた。總夫も特に父の会社を継ぐことを意識することはなかった。けれども大学を卒業する頃には、男兄弟が一人もいなかったこともあり、友人がオーナーを務めるホンダのディーラーで一年間営業を経験したのち、一九六九年、大成紙器印刷に

入社したのだった。

敏腕営業マン・總夫

人付き合いが好きで、ラグビーで鍛え抜かれた粘り強さを持つ總夫は、営業力に秀でていた。三洋電機、いの子屋、三輪素麺、ユニオン、共栄製茶……。次々と新規顧客を獲得。中でも、總夫はいの子屋に注力した。いの子屋はもともと饅頭屋であったが、この時期、砂糖のギフトに注力しており、箱の需要が高かった。一九七〇年代後半から、八十年代にかけての約十五年間、總夫は一人で営

業をこなし、売上を四億五千万円にまで拡大させた。一方、父であり社長の幸二郎は第一線からは退き、バックオフィスに回っていた。

總夫が四十歳になったある日のこと。ついにそれまで溜まっていた父へのフラストレーションが爆発した。

「もういい加減、社長を交代してくれ！ そうしないと、俺は辞める」

總夫の三十代は、父との闘いの日々でもあった。営業に行けば、顧客からは可愛がられ、成果もうなぎ上り。しかし、社内では社長である父・幸二郎が経営権を握り、自由に使え

る経費や投資費用は全くない。毎日営業現場に出ていた總夫には、顧客が何を求め、自社がどんな新製品を提案すべきか、どんどん発想が湧いてくる。しかし、幸二郎に訴えても全く実現されることはなかった。

總夫の本気を感じた幸二郎は、その一年後の一九八七年十二月、自身は会長へと退き、代表権を總夫に譲った。以降、四代目・總夫による大成紙器印刷の快進撃が始まったのだった。



高校生の總夫



会長時代の幸二郎